

# 英語母語話者における日本語単語アクセントの習得

— 知識と生成の関係から —

高橋 恵利子

The acquisition of Japanese accent in English speaking learners

— The relationship of knowledge and production —

Eriko TAKAHASHI

キーワード：アクセント型、英語母語話者、生成、知識、正誤判断

## 1. はじめに

近年の第2言語の発音指導においては、分節音だけでなくリズムやアクセント、イントネーションといった超分節要素の指導の必要性・重要性が指摘されている。学習者の母語との対照研究や記述報告から習得困難点については明らかにされつつあるが、習得プロセスや指導方法については未解明な部分が多い。中でも日本語の単語アクセントは、文の韻律を規定する重要な要素でありながら、教室現場で十分な指導が行われていないという現状がある。恣意的な上にバリエーションも多いアクセントを1語1語覚えなければならないという負担感も大きい。日本語母語話者のアクセント習得に関しては、知覚より生成が先行するという指摘があるが(白勢・笈2010)、日本語学習者におけるアクセント型の習得プロセスは十分に解明されていない。

分節音の生成については、知覚やモニター力等との関係が検討されているが、アクセントの場合は語ごとのアクセント知識が必要となる。知識とは、その語が実現されるべき高低パターンに関する内在化されたイメージを指す。高橋(2012)は、日本留学経験を持つ70名の中上級韓国人学習者(慶尚道方言話者を除く)を対象に、単語アクセント生成に知識、知覚、モニターがどの程度関与しているのかを検討した。その結果、アクセント生成成績にもっとも大きく関与するのは語ごとのアクセント知識であるという結果が得られた。また、アクセント型別の分析結果から、聴覚インプットから語ごとのアクセント情報が蓄積され生成に至る可能性が指摘された。但し、この結果が学習者の母語に関わらず一般化が可能なものであるかについては未検証である。

本稿では、上記の課題を検討するために、英語を母語とする日本語学習者に対して実施した小規模調

査の結果について報告する。

## 2. 先行研究

英語母語話者のアクセント生成傾向については、すでにいくつかの報告がなされている。文章の読み上げ音声を分析した中川(1996)は、英語を母語とする学習者には、①第1音節を高く発音する傾向、語末から2拍目の音節を高くする傾向がある、②ピッチ幅が狭い、③高くなる音節が判断できない、④特殊拍を含む語は困難、といった特徴を報告している。語の長さを統制した調査はなされていないが、語末から2拍目、3拍目にアクセントを置きやすいという傾向は他の先行研究でも指摘されている(久野1998、戸田1999)。また、アクセント型は前後の環境に左右されやすい(土岐1980)、学習者の生成するアクセント型は助詞の付加や活用によって変化する(Taylor 2012)という指摘は、単語アクセントの定着の困難さを示している。

知覚に関しては鮎澤他(1995)、西沼(1997)、坂本(2008)などがある。西沼は54名の留学生に対し、刺激語を聞いてアクセントを記入する課題を実施した。その結果から、①平板型(論文中では0型<sup>1)</sup>)の成績が最も良い、②明確なピークのある頭高型、中高2型の成績が良いといった傾向を指摘した上で、米語話者はピッチピークでアクセントを判断していると述べている。

英語母語話者のアクセント生成、知覚傾向は韓国人学習者とも重なる部分がある。韓国語も英語と同じく音節言語であり、特殊拍が強く高く発音される傾向が指摘されている(中東2001)。英語と同じくアクセントは音節単位で付与されるが、韓国語、特にソウル京畿方言は日本語や英語と異なり、アクセントは語の弁別機能を持たず、文頭・句頭から2音

節目をピークに句末まで下降するという韻律的特徴を持つ(趙 2007)。こうした特徴が日本語読み上げ時に持ち込まれることで、単語単独発話の場合は中高型のようなピッチパターンが多くなると言われる。韓国人学習者によるアクセント知覚に関しては、まず平板型(0型)と頭高型の核位置の聞き取りが習得されるとされており(李・鮎澤・西沼 1997; 鮎澤 1999)、西沼(1997)が示した英語母語話者の傾向との類似が指摘できる。

韓国人学習者のアクセントの生成と知識の関係を調査した高橋(2012)では、アクセント型によって課題成績に有意な差があり、中高型の過剰生成を除外すると、読み上げ課題と正誤判断課題の結果にアクセント型ごとの連動が見られた。またどの課題においても尾高型の成績が最も低かったことなどから、アクセントの習得に型の違いが関与している可能性を指摘した。では、英語話者の日本語のアクセント習得においても、型の違いによる影響は見られるのであろうか。韓国人学習者とのような相違点が見られるのであろうか。英語話者のアクセント生成に関する中川(1996)の指摘を踏まえると、第1音節を高く発音する傾向や語末から2拍目の音節を高くする傾向から、頭高型、尾高型が多く生成されることが予想される。知覚に関しては、西沼(1997)の指摘から、平板型の成績が最も高く尾高型の成績が最も低くなることが考えられる。英語母語話者のアクセント習得における型の影響を調査するため、高橋(2012)の枠組みの一部を用いた小規模調査を行なった。研究課題は以下の3点である。

1. 生成課題と正誤判断課題において、アクセント型による成績の差はみられるか。
2. 英語母語話者においても韓国語話者と同様にアクセントの生成課題と正誤判断課題に、アクセント型ごとの対応が見られるか。
3. 英語母語話者のアクセント弁別にどのような傾向があるか。

### 3. 調査内容

#### 3-1. 対象者

調査対象は北米の大学で日本語を学ぶ20歳代の大学生(中級以上)である。19名の調査協力者のうち、英語を母語としない者、早期バイリンガル、刺激語に未知語があった者を除外した11名を分析対象とした。対象者の学習背景情報を表1に示す。この集団

の日本への留学期間は平均1.8年、日本語学習期間は平均8.3年であった。日本語のアクセントについて、1語ずつ覚えるような学習を経験した者はいなかった。

表1 調査対象者の学習背景情報

ID	性別	留学期間	学習期間	日能試
E1	M	なし	3年	2
E2	F	3ヶ月	4年	なし
E3	M	1年	6年	2
E4	M	4ヶ月	8年	なし
E5	M	4年	8年	2
E6	M	2年	8年	2
E7	F	なし	9年	N2
E8	M	5年	10年	1
E9	M	8ヶ月	11年	1
E10	F	2年	12年	N1
E11	F	5年	12年	2

#### 3-2. 課題と刺激

今回の調査では、アクセントの生成を確認するための単語読み上げ課題(32問)、知識の有無を確認するための正誤判断課題(32問)、アクセントの弁別力を測るための知覚課題(36問)を課した。

読み上げ課題と正誤判断課題には、生成と知識の対応を検討するために同じ刺激語を用いた。刺激語は日本語能力試験2級相当以下の単語から、撥音、促音を含まない3拍の名詞を選定し、助詞「が」をつけた形で、頭高型、中高型、尾高型、平板型各8語ずつ配置した。また、無声子音は後続する母音のF0を上昇させるという先行研究(Hombert, et al. 1979; 清水 1999)や、1拍目に母音がある場合は高く発音されにくい(土岐 1980)といった指摘を踏まえ、語頭に有声音を持つ語と無声音をもつ語をアクセント型ごとに半数ずつ取り混ぜた。刺激語を表2に示す。

アクセントの知識の有無を確認する方法としては、内省に基づいて核位置に印をつけさせるなどの方法が考えられるが、内省できるほど明確な知識がないことも想定されることから、聴覚刺激による即時的正誤判断課題を用いた。課題は、ランダムに呈示される音声刺激に対して、アクセントが正しいかどうかを即座に判断するものである。刺激数は64個で、正誤両刺激に正しく反応できた単語数を成績とした。誤刺激として採用する型をどうするかは課題

表2 調査に用いた刺激語

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
有声	緑が	あなたが	休みが	昔が
	眼鏡が	匂いが	仲間が	大人が
	命が	おもちゃが	男が	後ろが
	涙が	お菓子が	明日が	南が
無声	花火が	花屋が	言葉が	仕事
	二十歳が	子猫が	鏡が	車が
	彼らが	卵が	話が	今年が
	世界が	砂糖が	光が	手紙が

の難易度を左右する問題であるが、韓国人学習者を対象とした高橋（2012）の調査では、誤刺激として頭高型で呈示された場合の正答率が高かった。この結果をふまえ、本調査では頭高型を避け誤刺激を作成した。調査に用いた誤刺激のアクセント型を表3に示す。

表3 正誤判断課題の誤刺激アクセント

*中高型	*尾高型	*平板型
二十歳が (A)	眼鏡が (A)	花火が (A)
命が (A)	彼らが (A)	世界が (A)
話が (O)	涙が (A)	緑が (A)
男が (O)	おもちゃが (N)	砂糖が (N)
光が (O)	子猫が (N)	匂いが (N)
休みが (O)	あなたが (N)	花屋が (N)
大人が (H)	今年が (H)	卵が (N)
昔が (H)	南が (H)	お菓子が (N)
手紙が (H)	後ろが (H)	鏡が (O)
仕事	車が (H)	仲間が (O)
		明日が (O)
		言葉が (O)

( ) は正しいアクセント型の頭文字を示す。

アクセントの知覚を測定する課題には様々な方法があるが、知覚結果を何らかの形で表出しなければならぬという方法的な困難さを伴う。通常、有意味刺激語を聴覚呈示し、刺激語をひらがなで記した用紙に下がり目を記入させる方式が一般的であるが、意図したとおりに記入できているか判断しにくい上に、有意味語を用いると既知知識や思い込みによる解答が混入するおそれがある。この他、拍の高低配置を視覚的に示した選択肢から刺激音と一致するものを選ぶ方法もあるが、拍と高低配置の読み取りや音の保持能力など、知覚とは異なる能力が必要とされる可能性がある。アクセントの知覚力を測定する最善の方法は未だ確立されていないが、本調査

では無意味語による AX 法を用いた。AX 法は、聴覚呈示される3つの刺激の中から1つだけアクセント型の異なるものを解答する課題である。刺激語は特殊拍を含まず、母音の無声化が生じないように配慮して作成した。3刺激にそれぞれ異なる文字列をあてた<sup>2)</sup>が、文字は呈示しなかった(図1参照)。4つのアクセント型を総当りで組み合わせ、組み合わせのパターン(12通り)とターゲットの位置(3箇所)によって36の問題を作成した。

なお本調査で用いた刺激音声は全て調査者が読上げ録音した。

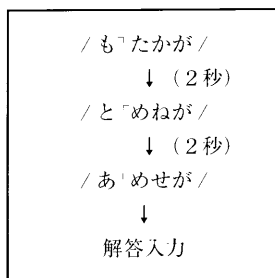


図1 AX法の刺激の具体例

### 3-3. 手続き

調査は個別に行なわれた。承諾書にサインした後、読み上げ課題、知覚課題、学習歴の確認、正誤判断課題の順で実施した。所要時間は1人当たり30分程度であった。

読み上げ課題では、PC画面上に呈示される刺激単語(読み仮名付き)をできるだけ早く読み上げることを求めた。その際、分かる範囲で正しいアクセントで読むよう指示した。読み上げ音声は本人の了承を得て録音した。刺激語は3秒間隔でランダム呈示した。本調査に先立ち4問の練習課題を実施した。所要時間は教示、練習を含め3分程度であった。録音した音声を調査者が聞き、ピッチの下降位置によってアクセント型を強制判断した。1ヶ月後の再評価との一致率は91.5%であった。

知覚課題では、連続して呈示される3つの刺激音声を聞き、アクセント型が1つだけ異なるものを解答するよう求めた。調査にはPCを用い、キー入力で解答させた。入力キーは刺激音の呈示順序と対応させた。ピープ音に続き3つの刺激語が2秒間隔で呈示された。解答時間は最大5秒であったが、解答が入力され次第、次の問題が呈示された。解答方法、キーの位置を確認し3問の練習を行なった後、不明

な点がないことを1頭で確認してから本調査を実施した。本調査では12問ごとに10秒のインターバルを2回設けた。所要時間は8分程度であった。

続いて、日本での留学経験、日本語学習歴など、学習背景情報について確認し、フェイスシートを完成させ、正誤判断課題に移った。連続して2度繰り返される刺激語のアクセントが正しいかどうかを2秒以内に判断し、解答用紙に記された「正/誤」いずれかにマークするよう求めた。刺激語は同じ語が連続しないよう配慮したうえでランダムに呈示した。32問終了した時点で10秒程度インターバルを置き、本人に確認してから残りの32問を実施した。解答方法の説明、4問の練習試行を含め、所要時間は10分程度であった。最後に、調査に用いた刺激語リストを口頭で英語翻訳させ、未知語が含まれていないか確認した。

## 4. 結果

### 4-1. アクセント型別成績

各課題成績を表4に示す。読み上げ課題は全体に成績が低い。知覚課題は、平均成績は高いが個人差が大きい。本調査対象者中、1年以上の日本滞在経験を持つ者が6名含まれていた。日本滞在経験の有無が課題成績に影響を与える可能性が考えられるため、各課題成績について対応のないt検定を行なった。その結果、知覚課題には有意傾向が見られたが( $t(9)=1.84, p=.09$ )、読み上げ課題( $t(9)=0.13, n.s.$ )、正誤判断課題( $t(9)=0.17, n.s.$ )には有意差はなかった。したがって、以後の分析では11名を1集団として扱う。

表4 課題成績 (n=11)

	平均	標準偏差
読み上げ (32点)	12.3	2.8
正誤判断 (32点)	15.3	5.5
知覚 (35点)	23.3	7.1

正誤判断課題と読み上げ課題の結果をアクセントの型ごとに集計し、表5に示す。

読み上げ課題においては中高型の成績が最も高いが、他の型との差は有意ではなかった( $F(3,30)=1.38, n.s.$ )。正誤判断課題では尾高型の平均正答数が最も多く、8語中平均4語以上正解しているが、他の型との有意な差は認められなかった( $F(3,30)=1.35,$

$n.s.$ )。つまり正誤判断課題、読み上げ課題ともに、アクセント型による成績差は認められないという結果となった。

表5 正誤判断課題と読み上げ課題の型別成績

	頭高	中高	尾高	平板
読み上げ	2.8	4.3	2.3	2.9
SD	2.4	2.2	1.9	2.3
正誤判断	3.3	3.7	4.4	3.9
SD	1.7	1.5	1.7	2.1

(最大値は8)

表6は正誤に関わらず読み上げ課題で生成されたデータをアクセント型ごとに集計したものである。出現度数とその割合をカッコ内に示した(総度数は352)。正誤を問わず最も多く生成されたのは中高型であった。読み上げ課題では中高型の成績が最も高かったが、知識に基づいて生成されたものではなく過剰使用によって正答数が増えたものと考えられる。正誤判断課題の中高型の成績がそれほど高くないこともそれを裏付けている。中川(1996)の指摘する第1音節を高く発音する傾向、語末から2拍目の音節を高くする傾向は本対象者においては顕著ではなかった。

表6 読み上げ課題で生成されたアクセント型

頭高型	中高型	尾高型	平板型
55(15.6)	149(42.3)	56(15.9)	92(26.1)

### 4-2. 単語ごとの生成と知識の対応

読み上げ課題と正誤判断課題の両課題で正答した単語は、知識もあり正しく生成できる単語であることから、アクセントが定着している可能性が高い。両課題ともに正解であった単語を表7に示す。延べ67語で、全体の20%弱に留まる。これにより、知識があっても正しく発音できない、正しく発音できても知識を伴っていないケースが大部分を占めていることが分かる。アクセント型による大きな偏りは見られない。単語ごとに見ると、両課題正解者が最も多かった単語は「世界が」「おもちゃが」「明日が」の3語であった。3語ともアクセント型が異なっていることから、本調査対象者において、アクセントは型別ではなく単語ごとに個別に習得されている可能性も考えられる。また3語ともに正解者は5名であるが、3語共通の正解者はいなかった。

表7 2課題共通正解単語とその正解者数

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
世界	5	おもちゃ	5	明日	5	仕事	4	3
緑	2	匂い	4	光	4	手紙	3	4
花火	2	お菓子	3	男	3	昔	2	2
眼鏡	1	子猫	3	言葉	3	大人	2	2
命	1	あなた	2	休み	2	南	2	2
20歳	1	花屋	1	仲間	1	後ろ	1	1
彼ら	1	卵	0	鏡	1	今年	1	1
涙	1	砂糖	0	話	1	車	0	0
	14		18		20		15	

読み上げ課題と正誤判断課題の関係を把握するため、2つの課題それぞれの成績と、2課題共通正答率をアクセント型別に図2に示す。2課題共通正答率とは、読み上げ課題でも正誤判断課題でも正しく解答できた単語の割合である。

尾高型は、他のアクセント型と比較すると正誤判断成績が最も高い反面、読み上げ成績は最も低い。このことから、本調査で用いた尾高型の刺激語については、アクセントの正誤判断はできても、自律的に生成できる段階ではない、あるいは、尾高型のパターンの実現自体に困難さがある可能性が指摘できる。

読み上げ課題の正答率と2課題共通正答率を見ると、頭高型、中高型、平板型の2課題共通正答率は読み上げ課題成績の50%程度に留まっており、正しく読み上げられた単語の半数程度は、正しく正誤判断できなかったことを示している。これに対し、尾高型は読み上げ正答率と2課題共通正答率が同程度であることから、正しく読み上げられた単語は正誤判断も正確であったといえる。これは他の型とは異なる特徴である。

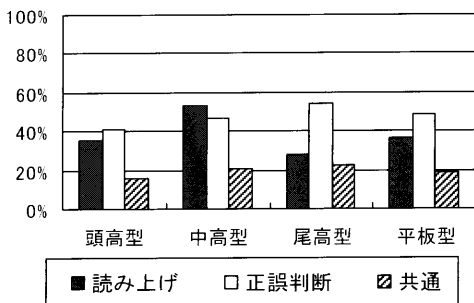


図2 読み上げ課題、正誤判断課題、及び2課題共通正答率

### 4-3. アクセント弁別傾向

知覚課題の分析に移る。本調査ではAX方を用い、アクセントの組み合わせとターゲットの位置により36問を作成したが、プログラム上のミスがあった1問を除外し、35問を分析対象とする。表8は、アクセントの組み合わせごとの正答率を示したものである。例えば「頭高×中高」のセルは、A-N-A、A-A-N、N-A-A、N-N-A、N-A-N、A-N-Nの6刺激合計の正答率を示している（アルファベットは各アクセント型の頭文字である）。

表8 アクセントの組み合わせ別正答率 (%)

	頭高	中高	尾高
中高	54.5		
尾高	57.6	37.9	
平板	84.8	74.2	89.1

本調査で最も正答率が低かったのは中高型と尾高型を弁別する問題で、正答率は40%に満たなかった(表8下線部参照)。英語母語話者に限らず、学習者にとって語中のアクセント核の特定が困難であることは広く指摘されており、今回の結果もこれと一致する。また、平板型の正答率が全体的に高いことから、際立った下降がない平板型と下降を伴う単語との聞き分けは比較的容易であることが分かる。本調査結果で特徴的なのは、頭高と中高・尾高との弁別成績が低いことである。鮎澤(1999)は、学習者のアクセント知覚習得は、頭高型と平板型の対立の把握から進むと述べている。語頭で急激に下降する頭高型は比較的その特徴を把握しやすいアクセント型であると思われるが、本調査対象者にとって、起伏式同士のアクセント、つまり下降位置の違いを聞き分けることは困難だったようである。

## 5. 考察

### 5-1. アクセント型

本調査は、英語を母語とする学習者を対象に、アクセント習得へのアクセント型の関わりを検討することを目的とした。主な研究課題は、1. アクセント型によって課題遂行成績は異なるか、2. 課題間にアクセント型ごとの対応が見られるか、3. アクセント弁別課題にどのような傾向が見られるか、の3点であった。

まず、アクセント生成の正確さを測るための読み

上げ課題と、アクセントの知識の有無を調べるための正誤判断課題では、両課題ともアクセント型間の成績差は有意ではなかった。

読み上げ課題、正誤判断課題ともに中高型の成績は他の型に比べ比較的高かったが、2課題共通正答数は88語中18語に留まった。つまり、1単語におけるアクセントの知識と生成が結びついていない状態であることが指摘できる。他の型についても同様の状態であると推察されるが、尾高型に関しては、正しく尾高型で読み上げられた単語の多くは正誤判断課題でも正解できていた(図2参照)ことから、生成成績は低いが、知識と結びついた生成であったことが伺える。但し、2名の対象者は読み上げ課題で1度も尾高型を生成していなかった(次頁表9参照)。従って、尾高型の生成にはかなり個人差があることにも留意する必要がある。

韓国人学習者を対象とした高橋(2012)では、すべての課題で尾高型の成績が最も低かった。尾高型のようなピッチパターンが母語にないため馴染みがなく、日本語においても尾高型単語は少ない上に平板型との違いも顕在化しにくいことから、尾高型のパターンそのものが気づかれにくいのではないかと考察した。英語母語話者のアクセントとイントネーションを調査した磯村(1996)でも、尾高型のコントロールは容易ではないことが指摘されている。本調査の尾高型単語に見られた特徴は、先行研究の結果とは異なるものであったが、この特徴がアクセントの型によるものか、語彙の親密度や使用頻度の影響によるものか、また学習者個人の生成傾向によるものかについては、別の角度からあらためて検証する必要がある。

## 5-2. 知覚・生成・知識

知覚に関しては、先行研究の指摘と矛盾しない結果となった。文節末まで高さが維持される平板型と語中で下降を伴う語との弁別正答率は平均80%を超えており、平板型との弁別は学習者にとって比較的容易であることが示された。ただ、平板型の次に頭高型が習得されるという鮎澤(1999)の指摘を踏まえると、本調査対象者は、頭高型を特定できる段階まで習得が進んでいない可能性が考えられる。

知覚、生成、知識という枠組みで考えると、平板型と他の型とのアクセントの聞き分けはできるが、読み上げ課題、正誤判断課題とも、アクセント型ごとの正答率に有意差は見られず、平板型の両課題正

解数も15語(17%)に留まった。FL環境の中国人学習者を対象に複合語アクセントの知識と知覚を縦断的に調査した柳(2008)でも、知覚課題と知識課題で同じ刺激語を用いていたが、一貫して知覚成績のほうが高かった。刺激音声を聞いてアクセントの位置を特定できることと、内在する知識が誤っていることは矛盾しない。イギリス在住の日本語学習者と非学習者を対象に、2拍語のアクセントの弁別テストを行った坂本(2008)は、母語話者と学習者と非学習者の成績に有意差は見られなかったと報告している。高低パターンの違いを弁別することと、語ごとのアクセントを知識として内在化させ生成に反映させることの間には、何らかの別のプロセスが介在すると考えられる。

## 5-3. 学習者の生成傾向

学習者のアクセント生成には、母語の影響だけではなく、個人間の差が観察された。表9は、読み上げ課題時に生成されたアクセント型を対象者ごとに示したものである。各アクセント型に8語配置されていたが、実際にはかなり偏った生成であることが分かる。すでに述べたように全体的に中高型の過剰使用が確認できるが、尾高型を全く使わない者(E4, E6)や、1つのアクセント型を集中的に生成する者(E5, E8)など、個人差も見られる。元々、日本語の3拍語に中高型・尾高型が少ない(田中・窪南1999)ことを考慮すると、頭高型と平板型を集中的に用いるE4の方略は、有効かつ実用的である。これらが意図的な方略であった可能性はもちろんある。しかし、時間制限のある読み上げ課題の負担を軽減するために、韻律調整に注意を配分せず、自分にとって読みやすい型を多用した結果とも考えられる。一部の対象者は、語ごとにアクセントを変えることなく、数語に渡り同じ高低パターンで読み上げていた。ある対象者は、何が正しいアクセントかわからないから全部同じになる、と訴えた。頭高、中高、尾高、平板という4つのパターン自体が明確に内在化されていないため、使い分けるまでに至らなかった可能性もある。本調査では、学習者の生成アクセントを強制的に判断したが、核位置が明瞭でないものも含まれており、どこまで意図的に高低がコントロールされていたのか定かではない。起伏式アクセント間の弁別に困難さが見られる原因も、内在するアクセント型の曖昧さに由来するのかもしれない。

表9 学習者別読み上げアクセント型

ID	頭高型	中高型	尾高型	平板型
E1	5	11	7	9
E2	3	16	11	2
E3	4	7	5	16
E4	10	3	0	19
E5	3	5	1	23
E6	11	21	0	0
E7	10	11	8	3
E8	3	26	2	1
E9	1	12	7	12
E10	0	18	12	2
E11	5	19	3	5

## 6. 今後の課題

留学経験のある中上級学習者70名を対象とした高橋（2012）では、アクセント型ごとの差を検出することができたが、今回のデータからはアクセントの型による有意な差は認められなかった。知識を伴った生成と思われる語についても、アクセント型に偏りは見られなかった。これが母語の違いによるものなのか、発音習得レベルの違いによるものなのかは不明であるが、アクセント型の習得プロセスという観点からも検討する余地があると考えられる。語の韻律情報が学習者の内部に「型」という範疇を形成するまでは、単語単位で個別に習得され、アクセントのパターンが内在化されることで型ごとの習得が進む、というプロセスは想定できないだろうか。教師や調査者にとってアクセント型は自明のものであるが、学習者にとっては必ずしもそうではない。アクセント型の違いがどのように習得されるのかという問題については、さらに追調査を重ねていく必要がある。

今回の知覚課題と読み上げ課題の結果からは、アクセント型の弁別と生成との間に直接的な関わりは見いだせなかった。アクセント型の違いを聞き分けることと、アクセントを語彙情報の一部として単語と結びつけ記憶することとの間には、何らかの学習過程があると考えられる。アクセントの習得を解明するために重要な問題であるが、本調査の結果からそこまで踏み込むことはできない。実験的な調査も視野に入れつつ引き続き検討したい。

付記 調査に協力して下さった19名の学習者の皆様、調査を受け入れご協力くださった先生方に改めて御礼申し上げます。

## 注

- 1) 西沼（1997）では平板型と尾高型を区別せず0型として扱っている。
- 2) 梁（2012）は、アクセントのABX弁別課題で文字列の異なる刺激語を用いることで天井効果を避ける事ができたと報告している。

## 引用文献

- 鮎澤孝子（1999）「中間言語研究—日本語学習者の音声—」『音声研究』第3巻第3号、pp.4-12.
- 鮎澤孝子・西沼行博・李明姫・荒井雅子・小高京子・法貴則子（1995）「東京語アクセント聴取実験結果の分析—10言語グループの結果—」『新プロ「日本語」総括班第2回研究報告会予稿集』<http://www.ninjal.ac.jp/archives/jalic/group5/95.10.14p25.pdf>（2013年12月17日閲覧）
- 李明姫・鮎澤孝子・西沼行博（1997）「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本学報』第38号、pp.87-98.（韓国日本学会）
- 磯村一弘（1996）「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」『日本語国際センター紀要』第6号、pp.1-18.
- 久野志保（1998）「米英語話者における日本語アクセントの生成」『音韻研究』（1）、pp.83-90.
- 坂本恵美（2008）「英語母語話者による第二言語としての日本語ピッチアクセントの習得—知覚的実験的研究—」『Sophia linguistica: working paper in linguistics』第56号、pp.139-150.
- 清水克正（1999）「H英語における閉鎖子音の有声性・無声性の音声的特徴」『音声研究』第3巻第2号、pp.4-10.
- 白勢彩子・笈一彦（2010）「幼児期のアクセント生成と知覚の相互影響」『日本音響学会聴解研究会資料』Vol.40, No.6, pp.507-512.
- Taylor, B. (2012) 「英語を母語とする日本語学習者による語末アクセントの生成」『言葉と文化』第13号、pp.77-94.（名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻）
- 高橋恵利子（2012）「日本語学習者のアクセント生成

- 力に関する研究－韓国人学習者を対象として－」  
 広島大学大学院教育学研究科博士論文。
- 田中真一・窪田晴夫 (1999) 『日本語の発音教室』  
 くろしお出版。
- 趙 義成 (2007) 「文字と発音の指導法」『韓国語教  
 育論講座 1』, pp.371-386.
- 上岐哲 (1980) 「英語を母国語とする学習者におけ  
 るアクセントの傾向」『アメリカ・カナダ11大学  
 連合日本研究センター紀要』 3号, pp.78-96.
- 戸田貴子 (1999) 「日本語学習者による外来語使用  
 の実態とアクセント習得に関する考察：英語・中  
 国語・韓国語話者の会話データにもとづいて」『文  
 藝言語研究, 言語篇』 第36号, pp.89-111. (筑波  
 大学)
- 中川かず子 (1996) 「英語母語話者による日本語の  
 音声（韻律）の習得に向けて」『北海学園大学人  
 文論集』 第7号, pp.95-118.
- 中東靖恵 (2001) 「単語読み上げにおける韓国人日  
 本語学習者のピッチ実現」『日本語教育』 第109号,  
 pp.80-89.
- 西沼行博 (1997) 「アメリカ人・フランス人日本語  
 学習者のアクセント聞き取り－母語干渉による知  
 覚のゆがみ－」『21世紀の日本語音声教育に向け  
 て』新プロ「日本語」研究班 3 「音声言語の韻律  
 特徴に関する実験的研究」チーム, 平成 8 年度研  
 究報告書, pp.5-12.
- 柳 悦 (2008) 「複合名詞アクセントの知識と聞き取  
 りの習得：中国北方方言を母語とする日本語学習  
 者への追跡調査」『日本語研究』 第28号, pp.17-  
 29. (首都大学東京)
- 梁 辰 (2012) ABX 課題を用いた東京方言アクセ  
 ントの聴取研究－中国の大学で日本語を専攻してい  
 る中国語（北方方言）話者を対象に－」『日本語  
 教育国際研究大会予稿集第三分冊』, p.99.
- Hombert, J. M., Ohala, J. J., & William, E. G. (1979).  
 Phonetics explanations for the development of  
 tones. *Language*, 55. 37-58.